

古代ギリシャにみる「癒しのトポス」と 現代の心理療法 (2)

——コス島・アスクレピオンのフィールドワーク——

駿 地 眞由美

“Topos of Healing” in ancient Greece and modern psychotherapy (2)

——A fieldwork of The Asklepeion of Cos——

Mayumi SURUJI

要 約

本研究では、コス島アスクレピオンについて、フィールドワークや文献調査から得た結果をまとめた。その結果、コス島アスクレピオンでは、ヒポクラテスによる臨床医学が萌芽したこともあり、エピダウロスなど他のアスクレピオンでの癒しの形式とは少し違っていたものの、同じく、病者の自己治癒力を信じそれを高めるといふ、宗教的ともいえる営みが行われていたと考えられること、そのためにさまざまな視覚的・心理的効果を狙った建築上の配慮が行われ、当聖所そのものが癒しの装置としての一大インスタレーションであったことなどがわかった。また、アスクレピオス信仰による癒しとヒポクラテス医学という二つのシステムがパラレルに存在・機能し、相互に影響を与えていたことは、高度医療が発展した現代においても民間医療信仰が存続し、病や治癒を体験するわれわれの心のプロセスを支えていることや、いくら科学が発展しようとも民間信仰に表わされるような病／治癒のイメージが必然性を持ってわれわれの心の深い層から生み出されていくこと、さらにはこれからの医療のあり方を考える上でも、非常に示唆的であると考えられた。

キーワード：古代ギリシャ、癒しのトポス、コス、アスクレピオン、フィールドワーク

1. 本稿の目的

筆者は、2010年度追手門学院大学短期在外研究の機会を得、「癒しのトポス」をキーワードに、現代の心理療法を再考すべく、古代ギリシャ・アスクレピオンの調査研究を行った（2010年8月）。本稿は、駿地（2012）に引き続き、その調査報告を行うものである。

アスクレピオンとは、人々を病から救い癒しをもたらすとされたアスクレピオスという医神を祀る聖所のことであり、礼拝や、夢見による神癒（インキュベーション）、心理学的治療、身体学的治療、外科的治療といった多次元の治療が行われていた、いわば古代の総合治療センターである。古代ギリシャを中心に数百のアスクレピオンが存在したと考えられているが、現存するものは少なく、そのうち最も保存状態が良く有名なものに、ギリシャのエピダウロス、コス島、そしてトルコのベルガモンのアスクレピオンがある。駿地（前出）においては、エピダウロスとベルガモンのアスクレピオンについてのフィールドワーク報告を行ったので、本稿では、ギリシャ・コス島のアスクレピオンについて報告したい。風土や地域性、時代によって、信仰の伝承や、根付き方、治療の相違点があると考えられ（駿地，前出）、それらを比較検討することも今後の課題であるが、その検討を行うためにも、本稿ではまず、フィールドワークや文献調査によって得られた結果を基礎資料として提示することとする。

2. コス島・アスクレピオンのフィールドワーク報告

以下は、現地の遺跡説明板や現地入手資料のほか、Kerenyi, K. (1956 岡田訳 2012)、Viakouli, P. (発行年不明)、The Kos Info Team (2012)、馬場 (2006) などをもとにまとめる。特に記述がない限り、写真は筆者が撮影したものである。

(1) 概要

コス島は、エーゲ海南東に位置するドデカネス諸島の一つであり、東西 40 km、南北 8 km、面積は約 290 平方キロ、海岸線の長さは約 112 km で、ロドス島、カルパトス島に次いで3番目に大きな島である。ギリシャ領であるが、ギリシャ本土よりもトルコに近く、トルコの港湾都市ボドルムとは 5 km ほどしか離れていない。気候は温暖で、日光がふんだんに降り注ぎ、肥沃な土壌と豊富な水源に恵まれているほか、長く続いた火山活動によって地形は変化に富み、素晴らしい海岸線や美しい村落など風光明媚な特徴をもつため、世界中から旅行者が訪れている。

コス島アスクレピオンの遺構は、中心地であるコス・タウンから 3.5 km 南西の地点にある。島の丘陵地帯のはじまるあたりの高台に位置するため、眺望は素晴らしく、コス・タウンや、肥沃な平野、また、対岸の小アジアの海岸と隔てている海も見渡せる (Fig. 1)。鉱泉からもさほど離れていないため、良質で豊かな温冷水を得ることができ、硫黄や鉄分を含んでいたことから、



Fig. 1 アスクレピオン上段テラスからの眺望。コス・タウンやエーゲ海、左手には対岸のトルコが見えている。

リウマチや皮膚病の治療にも効果的だった。さらに、温暖な気候や日光、澄んだ空気、緑の木立という好環境に恵まれており、Kerenyi, K. (前出) の言うように、その立地には、純粹に宗教的な観点とともに、健康上の配慮もまた尊重されていたことがうかがえる。

コス島アスクレピオンは、数多くあるアスクレピオンの中でも突出し、ヘレニズム時代に建てられた最も有名な治療センターとして名を馳せているが、1つには、後に述べるようにその壮麗な建築学的特徴のためである。そして2つめには、前460年、医学の祖とされるヒポクラテスがここコス島で生まれ、アスクレピアダイ（アスクレピオス一門の意）という医師集団の一員として医学実践と医学教育を行い、病の治療を観察や経験にもとづく科学的な知識と職業的な倫理観で結びつけ、臨床医学を創始したことによる。彼の臨床医学の考え方は古代ギリシャを初めとする世界の多くの地域や、現代においても大きな影響を及ぼしており、医師の倫理・任務などについての宣誓文である「The Hippocratic Oath ヒポクラテスの誓い」が、「医の神アポロン、アスクレピオス、ヒュギエイア、パナケイア、及び全ての神々よ。私自身の能力と判断に従って、この誓約を守ることを誓う…」で始まることは、医学にかかわるものなら誰しも知っていることであろう。馬場（前出）によると、大プリニウス『博物誌』29巻1章4では、コス島アスクレピオンとヒポクラテスとの関係は次のように語られている。

その当時（＝ペロポネソス戦争当時）ヒポクラテスは、それ（＝医術）を光明の中へ呼び戻した。彼が生まれ育ったコス島はアスクレピオスに捧げられていて（*Aesculaio dicata*）、

第一級の名声を誇り、その実質を具えていた。ところで、病からの「癒し」を得た人たち (*liberati morbis* = 「病から解放された人たち」) は、「癒し」の際の「加勢」 (*auxilium* = 補助手段) が何であったかを同神の神殿に書き記す慣習となっていて、類似の病状に対する今後の処方役に役立たせていたのだが、ヒポクラテスはそれらの記録を書き写していたと伝わり、われわれのウァロー (=ローマ共和制末期の博識多才な文筆家) が確信しているように、その神殿の焼失 (*templo cremato*) にもかわらず、これら (の症例記録) にもとづいて、「臨床医学」 (*clinice*) と呼ばれる医学 (*medicina*) を創始したのである。(馬場, 2006, p 345)

ここでいう神殿が、現存する神殿とは異なり別の場所のものであったこと、そして、現在ある聖域が建設されたのはヒポクラテスの死後であることには留意しておかなければいけない。しかし、いずれにせよ、コス島アスクレピオンはヒポクラテスの生前すでに存在していて、そこでのアスクレピオス信仰による癒しと、ヒポクラテスによる経験医学が相互に影響を及ぼし合っていたと考えられる。なお、馬場 (前出) によると、アスクレピオス信仰は前4世紀半ばに国家的祭祀となったが、それ以前には民間祭祀として行われていたと考えられている。そして、コス島にもともと存在していたアスクレピオス信仰がどのようなもので、どのようにはじまったのかなどについてははっきりわかっていないものの (他のアスクレピオンに関しては、エピダウロスから勧請などがその起源として考えられている)、そこで萌芽した学問的・医学的影響がコス島以外のアスクレピオンにも及んだと考えられたと考えられ、Kerenyi, K. (前出) はその歴史的経緯を次のように推測している。

まずコス島の医療学校で発展した高水準の医学が達成されたあと、治療はエピダウロスの療養地に由来する宗教的な深みへと転向し、その影響力はコス島そのものにさえおよんだが、最後に医学的なものが初期帝政時代のエピダウロスにおいてもふたたび優勢になったという経緯である。もっとも、エピダウロスに先行したコスの時期が宗教心を欠いていたと考える必要はなく、そこにはただ別種の宗教があったのである。その時期は、病人の宗教ではなく、医師の宗教と医師の指導的役割とによって特徴づけられる。(Kerenyi, K., 1956 岡田 訳, 2012, p 80)

Viakouli, P. (前出) においても、コス島ではアスクレピオス信仰による治療とヒポクラテス医学という二つのシステムが並行して存在・機能し、それはどちらかを排除したり拒否したりするものではなく、むしろ相互作用と尊敬の関係にあって、神官と医師は、癒しの技を発展させ苦難にある人間を解放しようとする同じ目的に向かって働いていたということが指摘されている。高度医療が発展した現代においても民間医療信仰は絶えることなく、われわれが病や治癒を体験す

るプロセスにおいて時に大きな支えとなっているが、そうした人間の心の営みや、民間医療信仰に表わされるような病／治癒に関するイメージの産出過程を考える上でも、古代コス島におけるこうした癒しのあり方は非常に示唆的であると思われる。

当聖所に関しては、前4世紀半ばから建設が着手され、ローマ帝政に至るまで、いくつもの段階を経て建設され、また、前142年の地震後には再建されたことが後の発掘調査により判明している。先述のように気候的・地理的に恵まれた条件にあったが、それは、治癒には新鮮な空気と良質な水が効果的であると説いたヒポクラテスの考え（小川（訳）、1963）を満たしており、当地は健康や回復にかなった理想的な地であったと言える。また、往時ここは糸杉の林苑であり、アスクレピオスの父であるアポロンの神域であったと推測されている。すなわち、アスクレピオス神殿が建設される前から当地は聖なる地として崇拝されていたのであり、そうした聖なる記憶を宿した地においてアスクレピオス信仰が育まれたことは注目に値する。こうした土地の力は、人々の信仰心や治療効果を高めることにもなったであろう。そうして前3世紀以降、当地は「医神アスクレピオスの聖所」として確立し、前2世紀ヒポクラテスによって建設された医学校が有名になったことによってますます多くの人々が訪れるようになり、聖所はさらに整備・拡張され、アスクレピオス信仰はヘレニズム時代、ローマ時代におけるコス島での公的崇拝として最も重要なものとなった。そして、後2世紀、アスクレピオンが再建された時代には、その信仰の重要性は島の銀貨にも反映され、コインの表はヘラクレスに代わってアスクレピオスの姿になり、裏にはアスクレピオスの主要な象徴である蛇が描かれた。また、当地において運動や音楽の大会が5年ごとに開かれるようにもなり、後3世紀半ばの地震災害によって急転直下の衰退にさらされたベルガモンのアスクレピオンを尻目に、242年には当聖所の大祭が全ギリシア的大祭に格付けされて頂点をきわめた。

こうして大発展を遂げ、数世紀にもわたって信仰が続いたのであるが、後426年に Theodosius II が聖地の機能を止めたことによって衰退が始まる。さらに469年と551年に島をおそった深刻な地震と津波、その後の地形の変化によって、アスクレピオンの建築物の大部分は破壊され、また、キリスト教の台頭によって、アスクレピオス信仰やアスクレピオンの存在は埋もれてしまった。再発見されたのは、1902年、ドイツの考古学者 Rudolf Herzog が、コス島の医者でありアマチュア歴史学者であった Iakovos Zarraphtis の協力を得て行った調査による。その後、イタリアの調査団によって発掘調査が行われたが、十字軍時代に聖ヨハネ騎士団が聖域の石材を持ち出して城の建設に使用したため、建造物はあまり残っておらず、当聖所はいまだ完全には明らかにされていない。また、前3世紀の詩人 Heroidas による戯曲『ミミアンボス』の中で、アスクレピオスによる癒しに対する感謝の奉納額が登場していたり、後2世紀にここを訪れた旅行家で地理学者の Pausanias が、この聖所にたくさんの奉納品があったことを記録していたりするほか、ローマ時代の地理学者・歴史学者であった Strabôn が、エピダウロスのアスクレピオンについて、「病む者たちと、癒しの有様を表わした奉納絵馬で常に満ちあふれていた」と語った上で、「この

ありさまはコスやトリッカの場合と同じである」とコメントしていたりするものの（馬場，前出）、これもまったく残っていないため、聖域が提供していた治療法やさまざまな教義も汲みつくされていない。

(2) 遺跡

現存しているアスクレピオンの境内は三段のテラスに整備されており、非常に大規模で、壮大なものである（Fig. 2）。整地以前の半ば自然状態にあった時からすでに、その丘の斜面は三段構造になっていたと推測されており、自然丘最上段のテラスから出土した前5世紀末の碑文によると、前5世紀すでに、テラス最上段は国営祭祀が守られる「神域」になっていて、糸杉の木立に囲まれ、「神聖な杜」として厳重に保護されていたことが明らかになっている（馬場，前出）。すなわち、アスクレピオンが建設される前から、当地は聖なる地として人々の心の深層に記憶され、崇拝されていた。なお、糸杉は、アポロンーキュバリシオスの神話に関係し、不死の魂、破壊されざる生の存在と、永遠、また、死や喪にかかわるものである。冥界の王ハデスに捧げる神木だとも言われ、現在でも墳墓の地には糸杉がよく植えられ、また、腐敗しにくいという素材の性質もあり、棺にも用いられている。こうしたことは往時の人々にとって、象徴的というよりもきわめて具象的に実感として体験されていたと考えられ、聖所を包んで繁る糸杉はまさしく聖と俗、生と死を分かち神域境界標として体験されていたのであり、暗く深いアポロンの糸杉の杜の、木漏れ日によって複雑に織りなされる明と暗、光と影の道を通り抜け、光り輝く神域へと入っていくことは、生と死が交錯する治療のプロセスを体験的に参詣者たちに予期させ、それ自体、死への畏怖と同時に心理的再生の契機を促すものであったのではないかと思われる。

①下段テラス

下段は、おそらくは紀元前3世紀半ば、別の見解によると紀元前2世紀半ばに建築されたと考えられている。そこは、癒しの聖地 *therapiuterion* のモニュメンタルなエスプラネードとなっており、下段テラスの北面中央がプロピュライア（表玄関の記念門）になっていて、参詣人は北側から階段を上ってこの門をくぐり、境内に足を踏み入れることになる。幅13.5メートル、23段もの階段を上って、視界を遮る高い外壁を備えた門をくぐると、突如広々としたスペースが眼前に広がり、荘厳な神殿が層構造で上段にそびえ立っているのを目の当たりにしたであろうから（Fig. 3・4）、参詣者はそれだけで大きなインパクトを得、心を揺さぶられて、神そして癒しの技への畏怖の念や、治癒への期待、また、治療儀礼に参入するためのモチベーションが否応なしに高められたであろう。

ここでは、67本の列柱をもったドーリック式のストア（柱廊）が、中央の中庭を囲んでいた。そして、ヘレニズム時代初期に、26の小さな部屋がストアの後方に建設されたが、これらは訪れた人々のあらゆるニーズに添うよう計画され、治療や、インキュベーションのための場所とし



Fig. 2 ヘレニズム時代のアスクレピオン復元図（全景）（Viakouli, P. より転載）
下段入り口の方向が北、奥が北。



Fig. 3 ヘレニズム時代のアスクレピオン復元図（正面）（遺跡説明版より）



Fig. 4 下段から見たアスクレピオン遺構

て機能したと考えられている（現在では土台が残るのみである）。回廊は幅 6 メートル、長さ 180 メートルであり、列柱は約 3.7 メートルと比較的低いものであったにもかかわらず、規則正しく並べられていたので、無限の長さの印象を与えていた。

また、南側には中段との境となる高い支持壁が設けられ、上にそびえ立つ神殿群をよりインパクトのある荘厳なものとして映し出す効果を作り出していたと考えられる。ヘレニ

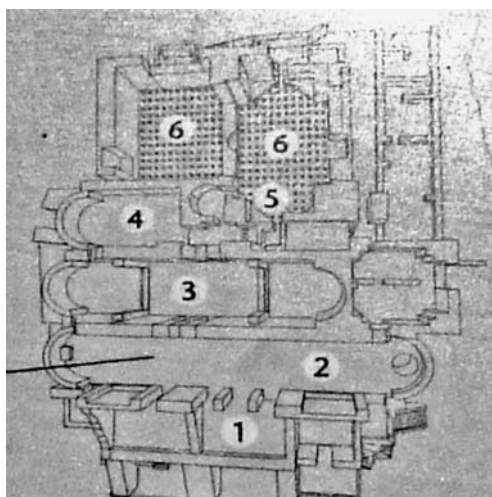
ズム時代初期には、水の流出や流入のための水源が壁に組み込まれ、水はファザードに沿って大理石の導管を流れ、訪問者の浄化儀礼や飲料や治療のために使われた。そして、後期ヘレニズム時代には、支持壁の東部はいくつかの壁がんで装飾され、多くの彫像や信仰の奉納物がしつらえられた。また、洞穴の形状をした水タンクが作られ、パン神のレリーフが飾られたが、それらは現在も見ることができる。中段に続く階段の西には、正面が神殿の形をした壁がんであり、コス島の医者でローマ帝王 Tiberius、Claudius、Nero のお抱え医であった Caius Stertinius Xenophon



Fig. 5 クセノボン神殿遺構



Fig. 6 公衆浴場複合施設遺構



- 1：ホール
- 2：脱衣所
- 3：冷浴室
- 4：微温浴室
- 5：蒸し風呂
- 6：温浴室

Fig. 7 公衆浴場複合施設内部（現地遺跡説明版より）

を記した台座が残っている (Fig. 5)。Herzog はそれを、“クセノボンの小さな神殿”と呼んでいるが、アスクレピオスや、彼の娘（妻とされることも）であるヒュゲイア、エピオネに奉納されていたとも考えられている。

2世紀半ばには、テラスの東側に公衆浴場複合施設 *thermae* が建てられ (Fig. 6)、冷浴室、温浴室、微温浴室、蒸し風呂、そして、床下暖房がしつらえられた (Fig. 7)。ヒポクラテス医学においては、人間は血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の四体液をもち、それらが調和していると健康であるが、どれかが過大・過小また遊離し孤立した場合に病気になると考えられていたが（小川，前出）、中島（2009）によると、そうしたヒポクラテスの四体液説に基づいてこの浴場は設計され、病人の体液の特徴に応じて、熱い浴槽（温・湿）、ぬるい浴槽（冷・湿）、熱い蒸し風呂（温

・乾)、ぬるい蒸し風呂（冷・乾）と、浴室と浴槽が区分されて温浴療法がなされていたという。また、南西にはトイレが設けられた。

②中段テラス

下段より6メートル高いところに建築されている中段が、アスクレピオス祭祀の中心であった。ここにアスクレピオスの祭壇の遺跡があり（Fig. 8）、それは当聖地の中で最も古い建築物で、前4世紀半ばには既に存在し、前3世紀には、古代の著名な彫刻家である Praxiteles の息子、Kephisodotos と Timarchos によって、アスクレピオスの家族を表わす彫像が装飾された。前2世紀半ばには、ペルガモンのゼウス祭壇をモデルにして再建されたと考えられている。

前300～270?年には、二柱式のアスクレピオス神殿がその祭壇に向かい合わせて建築された（Fig. 9）。この神殿は、小アジアのマグネシアにあるゼウス神殿と類似の建築的構造をなしていたが、前2世紀にはローマ皇帝が巨額の費用を投じてそこに優雅な装飾を施させた。また、祭祀用具保管庫、さらに、インキュベーションのために、男女ひとつずつの寝所をもつアバトン（お籠り堂）（Fig. 10）（ローマ時代には奉納品所蔵庫や書庫として提供されていたことも示唆されて



Fig. 8 アスクレピオス祭壇遺構



Fig. 9 アスクレピオス神殿遺構



Fig. 10 アバトン遺構



Fig. 11 野外集会場遺構



Fig. 12 中段（上段からの眺望）

いる)、また、司祭たちのための半円形の野外集会所 (Fig. 11) が建てられ、その土台が今も残っている。後2世紀、アントニヌス時代には、アポロンに捧げるコリントス様式の周柱式の神殿が建築された (Fig. 12)。

③上段テラス

上段は、前3世紀初頭、中段より11メートル高いところに建設された。中段から続く階段は、幅38.15メートル、60段あり、一歩ずつ階段を上って頂上に向かう体験は、壮麗なエピローグにふさわしかったであろう。

上段の中心部には、一列の列柱で取り囲まれた大理石のドーリック式のアスクレピオス神殿が建築されたが、これは、前4世紀に建築されたエピダウロスのアスクレピオス神殿に競って建設されたもので、列柱はエピダウロスのものと同じ形、同じ数 (短辺6本、長辺11本) で緻密に再現されたものの、より荘厳なものになるよう、エピダウロスのものより3分の1大きな規模で作られた (エピダウロス: 11.76×23.09メートル、コス: 15.96×31.17メートル)。北向きで、他の建築物と調和して印象的な配置であったとされる。中段の神殿とその祭壇が信仰の中心として残っていたため、この新しい神殿は祭壇を持たなかった。

上段は、周柱式のドーリック様式の大理石のポルチコによって囲まれていたが、そこには多くの部屋が配され、インキュベーションのための寝所に使われていたと考えられている。その奥行きは6メートル、端から端までの長さは177メートルであり、最大数の参詣者に対応することができるよう計画されていた。アスクレピオンがペルガモンの王 Eumenes II の庇護下に置かれた2

世紀前半に再建されたが、初期は木造で、高さなどは小さめに作られており、上段やアスクレピオス神殿を実際よりも大きく感じさせる効果があったと考えられる。

（3）癒しのプロセス

概要のところで見たとおり、当聖地は1902年に発見され、その後発掘調査が行われたものの、碑文や奉納品などが残っていないため、どのような治療法が行われていたかについてはいまだ明白ではないが、ほかのアスクレピオンと同様に、マッサージや、温冷水を用いた治療、食事療法、運動療法、音楽療法などが行われていたと考えられている。そして、エピダウロスの模範になって改築され、アバトンを備えていたことから、インキュベーションもまた行われていたと考えられる。Kerényi, K.（前出）の言うように、観察と経験に基づく臨床医学が発展した当聖所においては、エピダウロスなど他のアスクレピオンでの受動的・神秘的・夢想的な形式による癒しに対して、能動的・思索的で、実践的・学問的な形式で表現される癒しが行われていたと考えられるが、これもまた Kerényi, K.（前出）が指摘するように、コス島の形式がエピダウロスに比べて宗教的でないわけではなく、「個々人の生き方の根源に崇拜の念を抱いて向かう営み」（Kerényi, K., 前出）が行われていたのであり、それはきわめて宗教的な営みと言えるものであったと考えられる。

すなわち、アスクレピオンにおけるインキュベーションが、考えられる限り最も直接的な治療措置に役立てられ、夢の中で癒しの神アスクレピオスやその象徴と出会うことが治癒につながると信じられていたことを考えると、治癒とは、病者が自らの病の体験をなぞり直す中で自分の心の奥底にある自己治癒力に出会い、癒しの元型を象徴化して発動することによってもたらされるものであったと言えよう（駿地, 2010）。「かくして病気の内的感情が人格化され、それが象徴によって己を表現するとき、癒しが到来する」（Meier, C. A., 1948 秋山訳, 1986）のであり、「病人は病状を好転させるまことに深い基盤を自分のうちに秘めているが、それをみずから活性化する機会があらえられたのである。…（中略）…現代の大気療法地や水療法地と同じく、健康に悪い劣悪な環境をできるだけ遠ざけ、またその宗教的雰囲気により、人間のもっとも深い層が治療の可能性を実現するのに役立つように周囲の環境が整えられた」（Kerényi, K., 前出）のであって、個々人の自己治癒力を信じ、そのための環境を整えることに奉仕することは、それ自体、きわめて宗教的な行為であったと言える。ヒポクラテスが、人間が病気になるのも自分自身を修復するのも自然の働きであり、病気を治すのは患者自身が本来持っている自然治癒力であるとし、医者が行うことはその力を強化することであるとしたことにもそれは通じるであろう。そうしてヒポクラテスは、人間にとっての空気、水、場所を重視し、病者の環境を整え、清潔を保ち、適切な食事療法を行う必要性を唱えたのであるが（小川, 前出）、これは科学的な考えであると同時に、人間の心の深い層にある自然治癒力を高めるための宗教的な営みであったと言える。

また、そうした自己治癒力を喚起するための仕掛けが、当聖所の建築学的特徴にもさまざまに見て取れる。それについては少しく先に見たが、古代からの癒しの記憶が眠る地において、死と再生を象徴する糸杉の暗い杜に入り、癒しの門をくぐると、突如視界が開け、暗い杜を背景にしてより一層光り輝くように見える明るく広い清浄な空間に投げ出され、荘厳な神殿が階段状に上へ上へと連なり重なっていく様子を目の当たりにすることは、見る者の心を揺さぶり、遠近法や明暗の対比効果も手伝って無限の感覚を与え、内的宗教性の感覚を高める視覚的效果をもっていたであろう。そして、糸杉の杜に守られながら天へと続いていくようなこの配置は、この上なく壮麗な全体的調和をもったインスタレーションとなり、訪れた者たちは、一步一步階段を上るごとに、治療への期待を高めていったものと思われる。こうした建築物全体で創り出す視覚効果は、エピダウロスやベルガモンのアスクレピオスとは大きく異なるところであろう。

そして、癒しが行われたあとの感謝の様子については、1981年、つまり聖域自体が発掘される以前に再発見された Heroidas（前250年頃）のいくつかの風俗劇 Memos から、多少の理解を得ることができる。Kerényi, K.（前出）や馬場（前出）によると、作中4番目の『アスクレピオス神殿で生け贄を捧げる女たち』という題名の戯曲には、コスの二人の女性が、黎明から聖域を訪れる巡礼の有様が描かれており、夜明けと同時に、持参した雄鶏が生け贄に捧げられ、アスクレピオスの妻あるいは娘とされる健康の女神とヒュギエイアの祭神像には、奉納額が捧げられる（癒しの有様を表わす奉納額が捧げられるのは他所のアスクレピオスでも同様であり、数多く出土しているが、残念ながらコス島の遺跡からは発掘されていない）。雄鶏は、蛇や犬とともにアスクレピオスの聖なる動物であり、太陽が生まれることを呼び起こす、あるいは告知する象徴としての意味を持っていたことから、アスクレピオスへの捧げ物として選ばれることも多かった。そして、そうした太陽-雄鶏の連関のほか、戯曲の中で女たちが訪れた最も古い小神殿の扉が東に向かって開かれ、祭祀の中心であり続けた大祭壇は東向きに設けられていたこと、さらに、エピダウロスのアスクレピオス神殿も東向きであったことなどからは、アスクレピオス信仰において太陽が非常に重視されたことがわかる。昇る太陽は、コス島のアスクレピアダイが一族の祭祀で崇拝する神秘的で神々しいものを表わす大いなる自然の象徴であるとされており（Kerényi, K., 前出）、太陽とアスクレピオス信仰の関係については、また稿を改めて検討したい。

3. おわりに

以上、コス島アスクレピオンについて、フィールドワークや文献調査から得た結果をまとめた。その結果、コス島ではヒポクラテスによる臨床医学が開花したこともあり、エピダウロスなど他のアスクレピオンでの癒しの形式とは少し違っていたものの、同じく、病者の自己治癒力を信じそれを高めるといった宗教的営みが行われていたと考えられること、そのためにさまざまな視覚的效果を狙った建築上の配慮が行われ、当聖所そのものが癒しの装置としての一大インスタレ

ーションであったことなどがわかった。このことは、「癒しのトポス」という観点から心理療法の場を捉え直そうとする本研究にとって、非常に意義深いものであった。また、アスクレピオス信仰による癒しとヒポクラテス医学という二つのシステムがパラレルに存在・機能し、相互に影響を与えていたことは、高度医療が発展した現代においても民間医療信仰が存続し、病や治癒を体験するわれわれの心のプロセスを支えていること、また、いくら科学が発展しようとも民間信仰に表わされるような病／治癒のイメージがわれわれの心の深い層から生み出されていくこと、さらにはこれからの医療のあり方を考える上でも、非常に示唆的であると思われた。

建造物や碑文等が失われているため、入手できた資料は多くなかったが、以上のように、今後につながるさまざまな結果を得られた。今後は、他のアスクレピオンとの比較検討や、“アスクレピオス”というイメージについての理解を深めつつ、「癒しのトポス」についてのさらなる検討を行っていきたい。

引用文献

- 馬場恵二（2006）. 癒しの民間信仰－ギリシアの古代と現代 東洋書林.
- Kerényi, K. (1956). *Der göttliche Arzt. Studien über Asklepios und Kulstaten*. Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft. (岡田素之（訳）（2012）. 医神アスクレピオス－生と死をめぐる神話の旅－ 白水社)
- Meier, C. A. (1948). *Ancient Inkubation und modern Psychotherapie*, Studien aus dem C. G. Jung Instiut, Vol.1, Zurich (秋山さと子（訳）（1986）. 夢の治癒力 筑摩書房)
- 中島旻保（2009）. ヒポクラテス生誕の地コス島を訪ねて 治療 91(1), 160-166.
- 小川政恭（訳）（1963）. 古い医術について－他八篇 岩波書店
- 駿地眞由美（2010）. 病／治癒のイメージについての臨床心理学的考察 追手門学院大学心理学部紀要, 4, 107-122.
- 駿地眞由美（2012）. 古代ギリシャにみる「癒しのトポス」と現代の心理療法（1）－古代ギリシャのアスクレピオンに関するフィールドワーク 追手門学院大学心理学部紀要 6, 33-53.
- The Kos Info Team（2012）. *Kos info*. (<<http://www.kosinfo.gr/en/kos-island-greece>>（2012年10月1日）
- Viakouli, P. (発行年不明). *The Asklepieion of Cos*. Athens : Davaris Advertising Publishing.

2012年11月30日受理